

アトピー性皮膚炎について

皮膚科医長
難治性皮膚疾患治療センター長

いしばし たかゆき

石橋 卓行



アトピー性皮膚炎（AD）とは？

「悪化と改善を繰り返す、かゆくて左右対称性に、かぶれの症状が主体となる病気」です。

赤ちゃんは頭、顔から全身に広がりやすいです。小学生までの間は首や肘や膝、大人では顔から体など上半身に皮膚症状が多いです。小さい頃に発症しても成長すると落ち着くことが多い一方、大人になっても持続する、稀に大人になってから発症する方もいます。そしてアレルギー性の病気（ADや気管支喘息など）が近いご血縁におられる場合が多いことも知られています。

発症のメカニズムとして、前記の要因に加え、季節による皮膚の乾燥など様々な病因が関わって皮膚のバリア機能が下がり、外からの刺激物に対して過敏に反応することが原因とされます。近年、これら炎症を起こすため細胞から細胞へ出す信号のような物質「サイトカイン」、そのやりとりを活発化する仕組み「JAK-STAT 経路」が発症に関係していることもわかってきました。

アトピー性皮膚炎の対策・治療

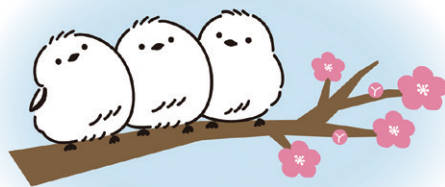
「日頃のスキンケアから、塗り薬（外用療法）、内服・注射による治療」などがあります。

スキンケアの注意点は、ADではお肌が刺激物から守られにくいので、入浴してお肌の汚れを、石鹸を泡立てて強くこすらずなでるように洗います。加えてお肌に水分や保護成分を塗り薬で補充

する「保湿」を行い、日傘や日焼け止めを活用して過度な日焼けを避けます。またダニや花粉などアレルギー反応を起こしやすい物質を、掃除など日常生活で避けていくことも重要です。

薬物療法は、ステロイド外用薬を中心に、免疫調整外用薬、抗アレルギー薬内服が以前より使用されており、現在でも重要な治療法です。さらに、近年従来と別の仕組みでお肌の炎症を抑えるPDE4阻害薬など新しい外用薬も登場しました。

そして最新のバイオテクノロジーを応用した治療法として、先述のADの成り立ちに関わる「サイトカイン」や「JAK-STAT 経路」に作用して皮膚の炎症を抑える薬が上市され、従来の薬と比較して高い効果が期待され、中等症から重症の患者さんにとって朗報となっています。ただ炎症はウイルスやカビなど外敵と戦う仕組みで、炎症が抑えられるとそれらに弱くなり感染症になりやすい可能性があります。またAD以外の病気に用いてもかえって悪化する場合もあり、事前に皮膚の細胞検査や血液・画像検査を行い、ADの正確な診断と、投与可能な全身状態であることを確認して治療開始します。



皮膚科の紹介

皮膚科では、湿疹、アトピー性皮膚炎、乾癬、にきび、带状疱疹などの一般的な皮膚疾患から、イボ、皮膚癌など皮膚腫瘍の診断と治療に至るまであらゆる皮膚の問題に対して幅広く対応しています。特に乾癬・掌跖膿疱症などの難治性皮膚疾患に対しては、重症度に応じて近年保険適用が進んでいる生物学的製剤・JAK阻害薬を用いた最新の治療も行っております。

また当科は当院各科の専門科らと協力し、さらに地域の医療機関から大学病院まで密接に連携し、数多くの皮膚疾患に対応できる体制を整えています。

国立病院機構熊本医療センター

- 📍 診 察 日 月曜日～金曜日
- 📍 休 診 日 土・日曜日及び祝日
年末年始（12月29日～翌年1月3日）
- 📍 受付時間 8：15～11：00
〒860-0008 熊本市中央区二の丸 1-5
TEL 096 (353) 6501（代表）
FAX 096 (325) 2519
H P <https://kumamoto.hosp.go.jp/>

※ 形成外科のみ受付は、水曜日以外の13：30～16：30となります。

※ 一部の科では、午後に予約診療を行っていますが、新患、予約のない方の午後診療は行っておりません。急患はいつでも受診できます。